

色彩学

BULLETIN OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN

VOLUME 3 NUMBER 3 2024



巻頭言 印刷メディア激変の30年

理事 川澄 未来子 (名城大学)

今年の7月に『色彩学』の編集委員長に就任しました。これから1年間、19名の編集委員で力を合わせて年4回の定期刊行を進めていきます。日本色彩学会の魅力会員として社会に発信すべく、編集委員一同、ワクワクと楽しみながら取り組むつもりです。

新しい委員体制を検討するにあたり、過去の編集委員名簿を拝見しました。『日本色彩学会誌』第1巻は1972年に刊行されましたが、私が目にした編集委員の名簿は1995年以降のちょうど30年分です。そこから編集委員長のお名前だけ切り出してみました(表1)。また、編集委員全員を数え上げてみたところ、30年間でべ443名もの人数でした。名取和幸元委員長は20年、木村敦前委員長は12年、永田泰弘元委員長は11年など、長期に渡って支えてくださった方々が大勢いらっしゃることもわかりました。そして、読みやすさと見栄えを兼ね揃えたクオリティの高い誌面は、辻埜孝之編集事務局のご尽力が大きいと思います。先駆者たちの努力と工夫の積み重ねが現在の『色彩学』を形作っていることを実感し、改めて身が引き締まる思いです。

さて、30年前の1995年といえば、グーテンベルグ以来の印刷変革が始まった時期でした。WYSIWYG (What You See Is What You Get) の発想のもとでDTP (Desk Top Publishing) が加速し、ポストスク립ト対応プリンターやモリサワの日本語フォントが出現し、LaTeXによるマークアップ原稿やPDFによるカメラレディ原稿が登場し始め、編集ソフトもPageMakerやQuarkXPressからAdobe InDesign

へと変遷していったのを覚えています。そして、その後のインターネットの普及と相まって、新聞・雑誌はオンデマンド型になり、論文はオープンアクセス型になり、編集会議や取材はオンライン開催が定着しました。かつて、対面で企画や編集を進め、紙の印刷物を封筒に詰めて住所ラベルを手作業で貼って郵送していた時代は、関東支部を中心に編集委員が構成されていました。現在、編集委員の居住地は全国にまたがっています。

つまり、平成以降の30年間、印刷技術や編集環境は大きな変化に晒され続け、その都度適応を余儀なくされた結果として現在の姿があります。既にSmart & Leanな編集工程が整っている『色彩学』ですが、おそらく今後も印刷メディアの変化は続くでしょう。これからの編集委員は、人間にしかできない知恵の発揮が求められそうです。多彩な分野と職業の編集委員で構成されている強みを活かし、社会の変化に適応しながら新たな模索を始めたいと思います。会員の皆様からのご意見やアイデアも歓迎しますので、どうぞお気軽にお寄せください。

表1 1995年以降の編集委員長一覧 (敬称略)

年度	編集委員長	年度	編集委員長
1995	児玉 晃	2010	武井 昇
1996	大井 義雄	2011	武井 昇
1997	大井 義雄	2012	名取 和幸
1998	永田 泰弘	2013	名取 和幸
1999	永田 泰弘	2014	名取 和幸
2000	永田 泰弘	2015	岡嶋 克典
2001	永田 泰弘	2016	須長 正治
2002	永田 泰弘	2017	須長 正治
2003	永田 泰弘	2018	須長 正治
2004	永田 泰弘	2019	須長 正治
2005	永田 泰弘	2020	木村 敦
2006	石田 泰一郎	2021	木村 敦
2007	石田 泰一郎	2022	木村 敦
2008	名取 和幸	2023	木村 敦
2009	名取 和幸	2024	川澄 未来子